

特集「日本の美しい色風景」 Special Issue: Beautiful Colorscape in Japan

日本の色彩環境の問題の所在と行く方：色彩の「レジリエンス」で未来を The Future Problems of Japanese Color Environment: Color Resilience for the Future

林 英光

Hideaki Hayashi

愛知県立芸術大学

Aichi University of the Arts

1. はじめに

日本色彩学会の重要な課題は、我が国の直面している様々な問題と同様である。現代の行き過ぎた物質文明と資本主義の行き詰まりが人間社会や自然界に様々な弊害をもたらしている中で、人々が求める幸せな世界とは何か、平和とは何か、心の文明とは何か。それらの有り様は、最終的にデザインや色彩に現れる。ここでは人の器である社会環境に関する基本について、「風土と伝統を活かして未来を創る」環境デザイナーとしての立場から述べる。

2. レジリエンスと色彩環境

五感の中で、デザインや色彩に直結するのは言うまでもなく視覚であるが、視覚は人間活動の約8割を占めると言われている。視覚の出発点となる光は太陽の核融合によって生まれ、その中の可視光線を人は色彩として享受し、幸せを願いながらこの地上に住んできたが、今や人間活動によって生じた地球規模の多くの問題の解決が迫られている。それらの問題は個々別々ではない。根源は切り離せない一点にある。今、世界は、「レジリエンス」という優しく穏やかなキーワードを手がかりに、諸問題に取り組まなければならない。

今起きている世界の紛争も、背景の長い歴史や種々の遠因はあるが、互いの許し合いを含めた近世あたりからの価値観で話し合えると平和になるのではと思う。その手本の一例は、スウェーデンとフィンランドの一触即発紛争の危機を託され、見事に救った国際連盟時代の新渡戸稲造の公平な発想の功績である。

未来の世界平和に最も貢献できるのは日本人なのかもしれない……。そう思う理由の一つは、日本人の根源には「もったいない」「みっともない」というような共有の美意識のようなものがあるからだ。国土計画・都市デザイン・商品デザイン等々の色彩一つ決めるにも、基本になる共有幻想が必要である。「説得」で

は気まずさが残る。共有幻想による「納得」によって決定・結論を得る方がよい。相手の気持ちになり、「慈しみ」の心が共有できれば、世界平和への大方針が見えてくる。東アジア5000年の都市の理想である四神相応は、現在の京都、名古屋、東京に生きている(図1)。

まず、環境の基本となる地域の風土、伝統、大地の色、植生、特徴的造形、色彩を把握しよう。ここから新たなデザインが始まる。



良き心のつくるものは良きパワーを、悪しき心のつくるものは悪しき影響を。

図1 四神相応略図

3. レジリエンスと未来環境

色彩を大量に活用し、商品を送り出すファッションの分野が、石油産業に次いで2番目のCO₂発生源であるという。色彩が気候変動にこれほど関わっていることには驚く。しかし、今や環境に取り組まない企業とは取引をやめると宣言する意識の高い業界も国外では出始めている。こうした状況に最も戸惑うのが日本の業界であろう。しかし、近世までの我が国はエコな暮らしを普通に実践していて、何一つ捨てるものの無

い、世界の手本とも言って良い質素堅実な文化を持っていた。その根底には、「もったいない」というエコの思想と「みっともない」という恥の文化がある。今忘れてかけているこの二言は、我が国の、いや世界の心のレジリエンスのもとになる言葉であろう。人の器である社会の環境においても、レジリエンスを正しく進めることが大切である。「未来の世界を救うのは日本である」というのは幻想じみた声かもしれないが、筆者は、その第一歩は、我が国の物心両面での再起動、すなわち、「レジリエンス」にあると思っている。この考えをもとに、筆者は「レジリエンス」を、日本色彩学会第53回全国大会〔名古屋〕'22のコンセプトキーワードとして実行委員に提案した。

現代は広大な宇宙に目を向けている一方で、まさにその反対側の極小の世界のウイルスに制御されている。ウイルスは地上の池や川がバクテリアなどによって汚濁すると、それを綺麗にリセットする働き（つまり、レジリエンス）があるという。現在増え過ぎ横暴な振る舞いの人類にも同じ作用を行使しているのかもしれない。

図2は現在の伊勢湾の水際線（薄青色）と縄文時代と同じ近未来の水際線（緑色）の状態の未来都市のあり方を提案した配置図である。図3, 4, 5は未来に向けた提案である。大地と海は自然に還し土地所有から離れ、過酷な気候変動から逃れるため宇宙船のような都市に住むことになるだろう。色彩もどう変わるか楽しみである。

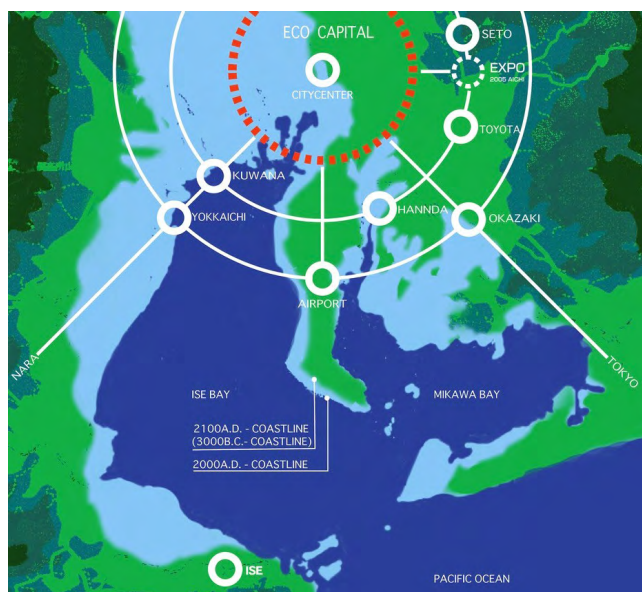


図2 名古屋周辺の未来都市のあり方
参考出典：「図説愛知県の歴史」河出書房新社

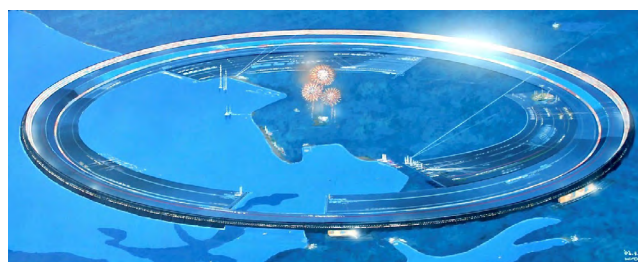
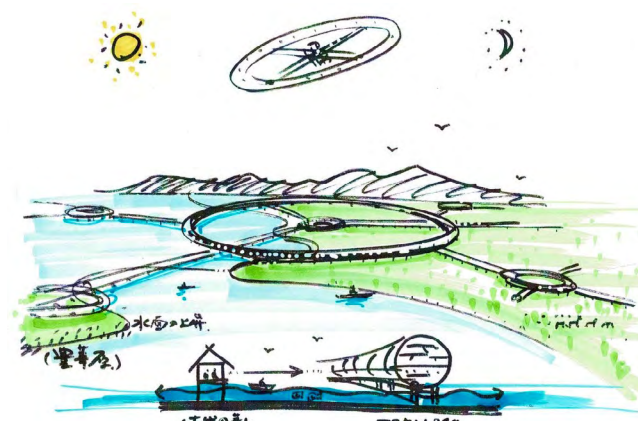


図3 1周42.195キロの名古屋市インフラ構想
イメージ図（林英光・丹羽宏暁）



人は高床式居住に戻り天空・海・大地を解放し、まるで巨大な宇宙基地が地上に降りたようなシェルター都市に住む。40年前のデザイン協会展での提案。

図4 気候変動に対応する未来都市の提案

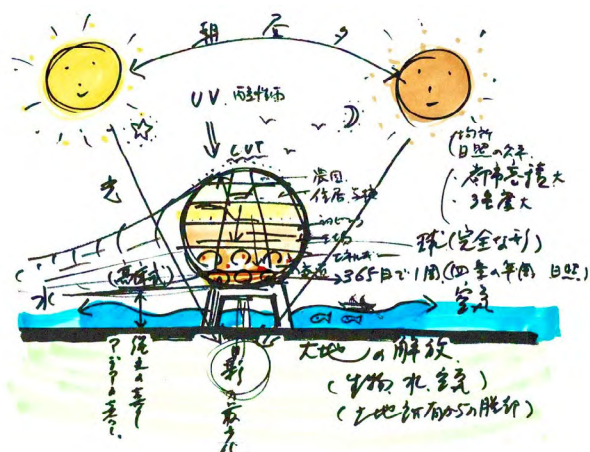


図5 上から 農園、学校、住宅、店舗、オフィス、工場

4. 日本の空間レジリエンスの基本システム

明治初頭に和洋の展開発展とも言える学校建築が山梨県から始まった。それは擬洋風建築で、進歩的な知事の発想の美しきインク壺スタイル学校建築であった。東西文化の見事な融合の、筆者の好きな2例である（図6, 7）。



図6 藤村記念館(明治8年開校, 甲府市甲府駅前)
(著者撮影)



図7 尾県郷土資料館(明治11年開校, 都留市小形山)
(著者撮影)

次は、世界の農協思想の始祖・大原幽学の指導を受けた遺産である、江戸期の心引き締まる佇まいである(図8)。障子、襖、雨戸、ガラス戸、暖簾の5種が開閉できる空間システムの例である。平素の暮らしだけでなく、四季の節句や冠婚葬祭まで展開できる融通無下の空間は日本住宅文化の粋と言える。日本人の所作まで凝縮されているかのような自在で美しい空間を大切に継承したい。

明治以降さまざまな文化が流入して来たが、我が国には世界に1000年先がけた空間デザインの基本システムがある。「座って半畳、寝て一畳」という人体から発した環境スケールは、感性による伝統のヒューマンスケールシステムである。この最小空間単位のリッチ



図8 大原幽学の薫陶を受けた旧林家(千葉県指定有形文化財)(著者撮影)

な暮らしの貴族文化から「天下取っても二合半」という武家文化の質実剛健や、書院造り文化も生まれた。まさに衰退成熟期を迎える我が国の暮らしのレジリエンスの基本である。しかし、戦後の尺貫法廃止と国際単位系への統一により、環境形成のあり方は日本伝統の美的感性から離れ、しっくりこないものとなった。日本の色彩環境は白・黒・グレー・自然素材色、および右の安全機能色で整理しよう(図9)。こうするだけで美しい日本の風景は蘇る。

人工景観の基本色彩

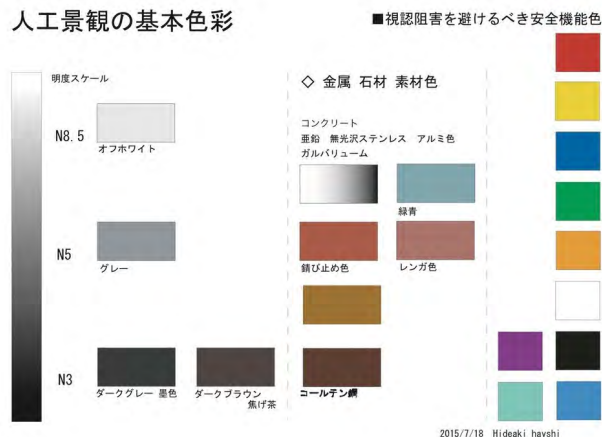


図9 人工景観の基本色彩

5. 世界のモダン建築の手本「書院造り」など

書院造り 簡素で厳しい武家文化の石庭と共に、究極の日本文化の集大成空間である。縄文、弥生、唐の文化、神道と仏教の習合の結果、日本の風土、列島に住む人々の調和する暮らし空間の集大成であり、ハレとケ、客のもてなしとしても見事に整理構成された暮らしの基本舞台である。

床の間 幼少期から書画美術品の質の高いものに触

れることは、現代的住居であっても残したい和室と共に大切な心の文化空間である。

多用な日本の文字文化のシステム 日本は、漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字・アラビア数字を日常誰もが自在に使いこなし外来語はカタカナで表し、漢字は数種の書体の変化と組み合わせで感情表現と、一文字見た瞬間形で意味を知る。しかし由緒ある地名などを、仮名にすると深い意味や歴史を失うことになる。

寺子屋の心を未来に 江戸期の寺子屋の妻さは、読み書き算盤と同時に行儀を教える人物が精神的職業であったこと、建物と外部環境も内部も整え清掃され、心を支える伝統的環境であった。現代の学校は、人の入れ物としての物理的空間と、芸術性の欠如した機能的環境であり、子供を育てる環境とは言い難い現状である。

6. 風土・伝統・未来の実践 旭市新庁舎のデザイン

筆者の故郷である千葉県旭市は、2011年3月11日の震災で海岸線の津波と土地の液状化の被害にあった(図10)。このため市庁舎の敷地に用意されている仮設住宅の給排水インフラが整備されたり、市庁舎の展望階「あさひ360」は、災害時の指令センターの機能が設定されたりしている。

東総台地と九十九里浜に囲まれた旭市は豊かな風土に恵まれ、農業と漁業がさかんな、また、先進医療の市である。この安閑とした風土に、市民会議議長の筆者は「日本一の市庁舎を」という壮大な目標を掲げてみた。

古代には伝説の「椿の海」という広大な湖が現在の市の中心にあったが、江戸期から干拓が始まり、干潟八万石と呼ばれる広大な田園ができた。その農村に現れた尾張藩士の三男坊が、後に世界の農協の始祖と言われた大原幽学という人物になる。彼は集会指導を快く思わない幕府に幽閉され獄死したが、彼の精神を支柱に、筆者は伝説の椿の海をテーマとした色彩計画を実践した。また、この地が生んだ人材には、世界で賞賛された無線七宝作家^{なみかわそうすけ} 濤川惣助、明治天皇に和歌のご指導をされた歌人で剣術家の海上胤平^{うながみたねひら}、国連初代大使外交官加瀬俊一らがいる。そこで、「日本一(の市庁舎を)」ではなく、この地が持つ風土と伝説と人材に着目した「オンリーワン」のビジョンで新庁舎の計画を進めた。図11はその片鱗である。また、新庁舎各階層の色彩には「白・黒・グレー・自然素材色」と「旭の朱赤」

「椿の紅」「田園の緑」「太平洋の青」「知的作業の紫」などを用い、建物全体のデザインは大地と天空と海風に靡くもののイメージとした。遙かに太平洋、西に富士、北西には紫山の愛称の筑波山も望めるこの市の風土と伝統を活かしたのである。



図10 千葉県旭市の3・11の震災時の津波(旭市役所より転載許可を得て掲載)

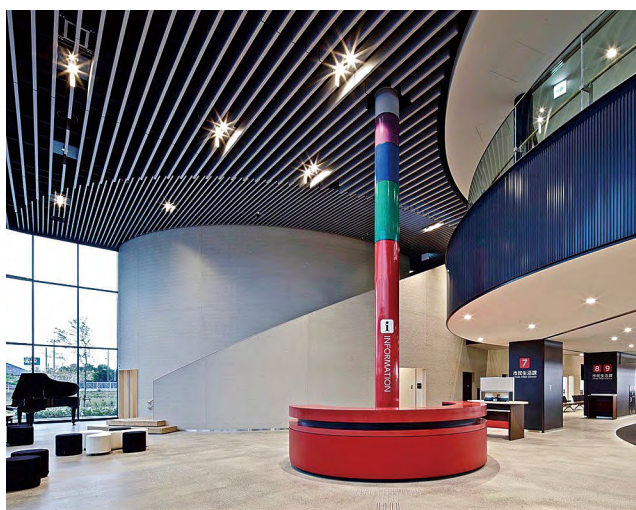


図11 新庁舎入り口ホール、市民コーナー、案内カウンター(旭市役所より転載許可を得て掲載)

7. まとめ

我が国にはハレとケのダイナミックな色彩があった。例えば、派手やか、賑やか、色鮮やかな祭りが全国にある一方で、世界一シンプルで優しく、この上なく穏やかで美しい風景と文化を表す色彩があった。こうした色彩がレジリエンスの具体的手法として注目され、国土全体から日常生活の隅々にまで行き渡らせる挑戦と変革が始まることを願う。